

活動成果報告書

平成25年度（第17回）「チョダ地域保健推進賞」

活動テーマ

“看取り地域包括ケアシステム”の構築をめざして
～玉東町の医療・福祉・介護保険関係者で運営する

地域版デスカンファレンスから築き上げるネットワーク～

応募グループ名称及び氏名（グループの場合は代表者名）

玉東町デスカンファレンス運営会議

代表者：大崎 景子

勤務先：玉東町

所 属：保健介護課地域包括支援センター

所在地：〒869-0303

熊本県玉名郡玉東町木葉372番地

T E L：0968-85-6242

F A X：0968-85-6554

E-Mail：oosaki-k@town.gyokuto.lg.jp



◇活動方針

- ・協働の力を活かす

玉東町が直営する玉東町地域包括支援センターを事務局に、町内の在宅療養支援診療所、介護福祉事業所、社会福祉協議会が協働し、“看取り地域包括ケアシステム”の構築をめざしている。協働の場は、「玉東町デスカンファレンス」とその開催を支える「玉東町デスカンファレンス運営会議」である。

◇活動内容と成果

平成20年に町内に1ヶ所の在宅療養支援診療所院長が、在宅の看取りを行った関係者等で“デスカンファレンス”を開催したことが契機となっている。行政の町の立場からも、この活動を重視し一部の事業所に留まらない町全体の医療・福祉・介護保険関係者並びに地域住民も参画する在宅療養推進体制構築への一歩と捉え積極的な支援をした。平成23年度には関係者の熱い要望を受け、事務局を当地域包括支援センターへ移し、同年「玉東町デスカンファレンス運営会議」を発足した。開催から6年目をむかえ、年々開催回数や参加事業所数も増え周知されつつある。既に19回のカンファレンスの開催、延べ1031名が参加している。近隣医療機関に少しずつ認知され、退院支援の要請が増えているのはその成果と考えたい。

近年の活動内容としては、以下のとおりである。

活動成果報告書

表1 平成23～24年度における開催状況

回	開催期日	デスカンファレンスの内容
13	23. 9. 14	自宅事例 ～三世代家族、共働き夫婦が支えた看取りの介護～ 49名参加
14	23. 9. 28	施設事例 ～訪問看護事業所と認知症介護施設（グループホーム）が連携した看取りの介護～ 37名参加
15	24. 2. 8	自宅事例 ～三世代家族が暮らす果樹農家を営む家での看取りの介護～ 83名参加
16	24. 4. 24	自宅事例 ～高齢な両親の介護をとおして家族関係が修復に向かった看取りの介護～ 46名参加
17	24. 10. 11	自宅事例 ～主たる介護者を家族が精神的にサポートすることで可能となった看取りの介護～ 59名参加
18	24. 2. 7	施設事例 ～認知症の高齢者に対する介護職員と医師の連携が柱となった看取りの介護～ 80名参加
19	25. 3. 21	退院時支援からはじまった在宅での看取り ～入院時から在宅療養願望が非常に強かった高齢者の看取りの介護～ 共催：公立玉名中央病院（近隣の玉名市に所在） 83名参加

デスカンファレンスは、カンファレンスの場に提供可能な看取りの介護事例が挙がる度に開催している。このため、不定期の開催になっているが表1のとおり、参加者は非常に多い状況である。まず、事務局は、運営スタッフに「玉東町デスカンファレンス運営会議」の日程調整をし、運営会議開催する。ここでは、事例の確認や発表者の協議が主である。会議前後の詳細な調整も不可欠で、以下のことを具体的には実施している。

- ・看取りの介護に係わった多くの関係者に、具体的なケアの内容や当事者や家族の様子を話してもらえるように促す。が、個人情報保護の観点からよく吟味して行っている。
- ・デスカンファレンスへの参加者は一般から各種専門職まで多岐にわたるため、多くの方にわかりやすい内容になるよう工夫し、パワーポイントや配付資料を作成する。

(参加者・職種等：家族、医師、薬剤師、臨床心理士、保健師、看護師、理学療法士、作業療法士、介護支援専門員、介護福祉士、社会福祉士、福祉用具選定士、生活支援相談員、行政職員、大学教育関係者、民生委員、一般住民)

※ 現在では玉東町近隣市町はおろか、熊本県庁職員や県下の遠方から行政関係者等の参加がある。

活動成果報告書

◇今後の計画

玉東町デスカンファレンスの取組みは、町民が望む“その人らしい尊厳ある死”を迎えるために、在宅サービスや施設サービス関係者は組織として、どのような“尊厳ある支援”や“その人が大切にされる支援”が求められているのか、又、専門職である自分には何ができるのかを分析、洞察し、相互に学び合う場となっている。

実際のデスカンファレンスの場では、一つの看取り事例を切り口に参加者全員が、「支援の良かったところ」「支援をよりよくするためには」の二つの問いに、率直な意見を述べるという形式をとっている。このことは、支援者が自分の支援内容についてフィードバックし、更に支援した“そのときの自分の想い”についてより深く感じ取れる機会になるとともに、バーニアアウトの防止にも役立っている。

また、まだ悲しみの冷めない中ではあるが、遺族の参加も時にあり、当時は十分にレスパイトケアできていなかった家族へのフォローが、幾分できているように感じる。周辺市町を見ても、遺族が参加するデスカンファレンスは他にはない。

デスカンファレンスでは、タイムテーブルに乗せ、事例の変化を追っている。ここにゆっくりと時間をかけ発表者（家族や支援に携わった関係者）の声を傾けると、いつの間にか、その場に居合わせたような“看取りの模擬体験”を頭の中でしている。この時間は、参加する各自のイメージする“尊厳ある死”のシミュレーションへのいざないとなり、これから直面するであろう高齢者への“看取りの介護”への覚悟のようなものが生まれている。各個人の望む終末は、確かに各々であるが、少なくとも、傍らに寄り添う者としての心構えが、「玉東町デスカンファレンス」から“看取り地域包括ケアシステム”の構築へ、積極的に動き出していると考えられる。今後は、玉東町民のひとりひとりが、“その人らしい尊厳ある死”を考える機会となるように、さらに普及啓発し、より積極的な参加を促していきたい。

【特にPRしたい事】

平成25年11月20日熊本県で開催された「日本介護福祉学会」シンポジウムにて、玉東町デスカンファレンス運営委員とデスカンファレンス参加者で「チーム玉東」を結成し、通常2時間以上かかる玉東町デスカンファレンスを縮小したシナリオを作成し、公開模擬カンファレンスとして実施した。そのことで、全国の介護福祉関係者に対して、玉東町で行っている看取りの体制づくりのためのカンファレンス内容、手法、看取りに関わる医師、看護師、介護支援専門員、訪問介護士など各専門職の働き方などを理解してもらう機会となった。

さらに、平成26年1月22日熊本県内のある医療機関やその地域周辺の介護事業所などで構成された学習会グループより依頼を受け、「チーム玉東」で作成した架空の在宅看取り事例のシナリオをもとに研修企画を立案実施する計画である。

これら外部関係者からの依頼を受けることで、玉東町だけではなく、町外の保健・医療・介護・福祉関係者との連携を図る機会となり、玉東町周辺地域の在宅医療および在宅介護の質の向上を図る一つの契機となってくると考えられる。

さらに、玉東町における保健・医療・介護・福祉関係者らが頻回に集う機会となりさらに顔の見える関係づくりができている。

熱意ある玉東町の保健・医療・介護・福祉関係者の日々の働きにより玉東町および周辺地域の看取り包括ケアシステムが構築されつつある。

以上